OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	友禅協会による「伊達模様」募集とその周辺 : 明治後期における流行創出との関わり
Author(s)	加茂, 瑞穂
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

友禅協会による「伊達模様」募集とその周辺
―明治後期における流行創出との関わり

加茂　瑞穂　京都工芸繊維大学

はじめに

友禅協会は，明治 25 年から 44 年まで懸賞付きで図案を募集した友禅染事業者による団体である。指定された画題に沿って紙にアイデアを描いて応募し，優れた図案には賞品や賞金が授与された。こうして応募された図案約 9500 枚が，一般財団法人京染会に保存されている。

なかでも，明治 38 年に開催された第 31 回の友禅協会図案募集は「伊達模様秋向」と画題が設定され，江戸時代前期から中期に流行した文様や構成で描かれた図案が多数を占めた。同年は三越が「元禄模様」を売り出し，流行した年でもあった。先行研究では，三越による「元禄模様」の流行が詳細に検討されてきたが，本発表では友禅協会のような図案を創出する構造が京都で新たに構築され，機能していたことを具体的に提示する。

なお，本発表で使用する「伊達模様」と「元禄模様」は，いずれも大柄で派手な模様である点で共通する。しかし，伊達模様は 18 世紀頃からの用例が確認できたが，元禄模様には具体的な用例がなかった。また，元禄模様は「元禄時代に流行した衣裳」と解釈されていたようである。

三越による「元禄模様」の流行創出について

明治 38 年 4 月に刊行された三越の PR 誌『時好』巻頭には「元禄模様長襦袢」が掲載された。大きく波，楾車，市松文様が配されたこの襦袢は「元禄模様」を代表する衣裳として示された。こうした大柄で派手な意匠が元禄模様と呼ばれ，単なる復古調ではない新たな意匠が生み出された。このほかにも「元禄○○」と名の付く商品が売り出され，三越がブームを主導した。

明治 38 年前後の友禅協会と応募図案
―「伊達模様」を中心に

明治 25 年から開始された友禅協会図案募集も 30 回を超えて，応募図案数も順調に増加していた明治 38 年前後の数年は，集中的に近代以前に遡るような画題を設定した。これは，急激な欧化に対する反省と日本文化の見直しという当時の風潮とも重なっていて，友禅協会も時流に合わせて募集画題を設定したと考えられる。友禅協会の募集画題は，明治 30 年代前半まで「雪」や「牡丹」，「花鳥」など具体的な「もの」を画題とする傾向にあった。しかし，明治 30 年代後半になると，「もの」ではなく，画題の範囲が広く設定されるようになり，かつ近代以前の意匠や時代に画題を求め，画題の傾向に変化が生じていた。

明治 38 年 5 月，友禅協会はかねてから募集していた第 31 回の図案審査をおこなった。画題は「伊達模様秋向」である。現在，第 31 回に応募された図案は 764 枚確認できており，応募枚数は，786 枚であった。

友禅協会の応募図案の傾向を整理すると，三越による「元禄模様」と同様の題材が選択されている一方で，異なる題材も選択されていたことが判明した。また，図案の描き方としては「元禄模様」においても指摘されているような，市松文様や匹田・鹿子文様で題材の内部を充填するように描かれた図案も多数応募された点が共通している。一

方，友禅協会は秋に向けた図案という点，商品化に直結していない点も三越とは状況が異なっていた。

このほかに，明治 38 年の友禅協会応募図案は，グラデーションのような表現を用いず，単一色で各部分を彩色している図案が非常に多く見受けられた。また，隣り合う面も明度や彩度の異なる色彩が多く用いられているため，題材ごとの境界をはっきりと描く図案が主流であったことがわかる。加えて，赤や橙や茶系統の色が比較的多く用いられており，この傾向は画題の「秋向」を意識したものであろうと考えられる。

友禅協会が募集した「伊達模様」を三越が売り出した「元禄模様」を単純に同一視することはできない。しかし，三越と友禅協会では模様の名称が異なるにも関わらず，売り出した製品と応募図案において同じ題材や描き方を使用する傾向が認められた。以上の状況と友禅協会が三越の元禄模様売り出しの一月後には，図案審査を行っていたことから想像できることは，明治 37 年から 38 年にかけて，友禅協会関係者には，三越が打ち出そうとした「元禄模様」に関わる情報がもたらされ，情報が共有された中で友禅協会の応募図案が描かれていたということである。

京都における「元禄模様」への対応

京都を拠点とする千總は，明治期の千總当主十二代西村総左衛門（1855–1935）が，明治 6 年頃から類型化された友禅の図案を一新させるべく，日本画家に下絵を依頼するなど大きな改革に乗り出し，友禅染の近代化を進めた。また，友禅協会の会員でもあり，明治 33 年の事務所移転時には事務用の備品をすべて寄付したほか，審査員もつとめ，縁の深い人物であった。

三越と千總とのつながりは，明治 38 年の「元禄模様」を売り出した際にも確認できる。PR 誌『時好』に新柄「元禄風槌車模様」が掲載され，この見本裂が現在も千總に所蔵される。見本裂の存在から，三越が「元禄模様」売り出しにあたり，事前に千總へ元禄模様の新柄製作を依頼していたと考えられる。

おわりに

友禅協会のような京都を拠点とした図案団体の動きを追ってみると，友禅染の技術革新と並行しながら新たな図案を描こうとしている様子が具体的にみえてくる。特に明治 38 年の図案募集は，三越による元禄模様売り出し以前から準備されている様子がうかがえた。また，応募図案からは，三越による元禄模様と共通する点も見受けられた。

三越の動きと連動するかのように友禅協会が図案募集を開催し，元禄模様類似する図案が描かれていたことから，友禅協会図案募集関係者には元禄模様に関する情報がもたらされていたことが推測できる。こうした情報がもたらされる背景には，京都が染織産業の中心地であったこと，加えて新たな染織品を生産する上で京都から創出される図案が重視されていたことがうかがえる。また，千總の制作した三越用の見本裂の存在も京都の呉服生産地としての役割を示しているだろう。

明治期に開催された図案募集の実態は未だ不明な点が多い。しかし，図案募集と呉服の生産・販売の状況とを合わせて考えてみると，当時の流行が創出される状況や背景，展開がより立体的にみえてくるのではないだろうか。

参考文献

神野由紀『趣味の誕生―百貨店がつくったテイスト』勁草書房，1994 年
根本由香「近代の服飾と復古趣味―「元禄」の流行をめぐって」『服飾美学』（27），1998 年
樋口温子「明治末期における着物図案の近代性―『元禄模様』を中心に―」『美術史』68（2），2019 年